

エッチュウバイの資源管理に関する研究

(水産資源調査・評価推進委託事業(我が国周辺水産資源))

岡本 満・寺門弘悦・井口隆暉・沖野 晃

1. 目的

エッチュウバイ資源の持続的利用を図るため、石見地域におけるばいかご漁業の漁業実態を調査し、適正漁獲量、漁獲努力量等の提示ならびに漁業情報の提供を行う。これにより、本資源の維持・増大とばいかご漁業の経営安定化を図る。なお、ばいかご漁業全体の調査結果については、後述する「2024(令和6)年の漁況」に記載した。

2. 方法

(1) 漁業実態調査

島根県漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者が記入した操業野帳を解析し、本種の漁獲動向、価格動向、漁場利用および資源状態について検討を行った。

(2) 資源生態調査

漁業協同組合 JF しまね久手出張所および同仁摩出張所に水揚げされたエッチュウバイについて、各銘柄の殻高を測定し、銘柄別漁獲量から殻高組成を推定した。また、漁獲物を買取り銘柄別の雌雄比について調査した。

3. 結果

(1) 漁業実態調査

2024(令和6)年のばいかご漁業におけるエッチュウバイの漁獲量は78.4トン(前年比90%)、水揚げ金額は5,565万円(前年比96%)であった。また、平年(過去10年)との比較では、漁獲量は114%、水揚げ金額は149%といずれも上回った。

エッチュウバイの銘柄は特大、大、中大、中、小及び豆の6銘柄である。全銘柄の平均単価は710円/kg(平年比130%)であり、1998(平成10)年以降では初めて700円/kgを上回った。特に小型銘柄は比較的高単価で取引され、小の平均単価は1,157円/kg、豆の平均単価は1,094円/kgとなり、2001(平成13年)以降、初めて1,000円/kgを上回った。

利用した漁場は、江津沖から島根半島沖の水深180~210mの範囲に集中していた。

(2) 資源生態調査

資源状態の指標となる1航海当たりの漁獲量(CPUE)は1,225kg(平年比107%)で、2021(令和3)

年)から4年連続で1,000kgを上回った。

1航海当たりの漁獲個数は約20千個(平年比100%)であった(図1)。近年は1航海当たりの漁獲量および同漁獲個数ともに増加傾向であり、資源は高水準にあると考えられる。

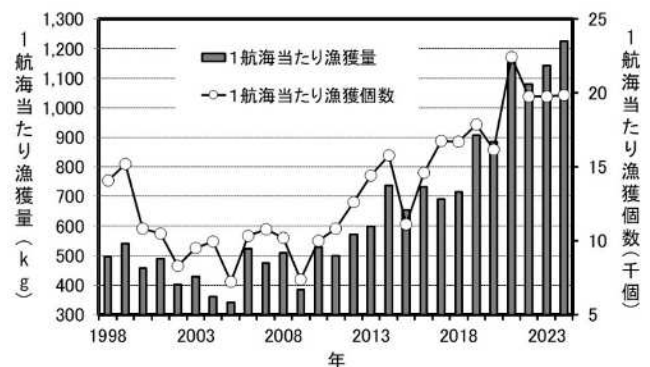


図1 1航海当たりの漁獲量および漁獲個数

漁獲物の殻高は40~124mmの範囲であった。2016(平成28)年以降40~80mmが平年に比べて増加傾向を示していたが、2019(令和1)年からは逆に低下傾向となり、2024(令和6)年も同様の傾向であり、小型群の割合が少ない状態が続いている。

銘柄別の雌雄比については、小型の豆、小、中は雄がやや多かったが、大型になるほど雌の割合が高くなり、最も大型の特大では雌が約9割を占めた。

4. 成果

調査で得られた結果は、島根県小型底曳網協議会ばいかご漁業者部会で報告した。調査結果は島根県石見海域におけるばいかご漁業の資源管理協定に基づく自主的管理措置である漁獲量上限の設定等の検討資料として用いられ、同海域のエッチュウバイ資源の持続的利用の推進に役立てられた。